

ハイスクール・フリー
ト 鉄の鳥と鋼の
巣

鯉提督

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ドイツの留学生艦アドミラルシュペーから逃げ切り、航行を続けていた駆逐艦晴風。一方で、この世界にいるはずのない鉄の鳥を載せた鋼の巣がこの世界に迷い混んできた。乗員は全員で10名、明らかに足りていない乗員で何故この世界に居るのかは、

目次

第0話	始まりの日	1
第1話	鉄の鳥	5
第2話	鋼の巢対鉄の鯨	13
第3話	出会い	18
第4話	武蔵との遭遇	25
第5話	見えざる恐怖前編	31
第6話	見えざる恐怖後編	36
第8話	機雷掃海作業	42
悪天候		50

第0話 始まりの日

真夏の東京、それほど死にそうな環境があったものか。

夏の東京はほとんど地獄だ、外は40℃もある、家から出れない。

冷房をガンガン利かせ、いつも通りにパソコンを開き、同じ仲間（ゲーマー）を集める

そしてSkypeを起動させ、

「全員生きてる?」

と、問いかけ数秒後に

「何とかね」

「節電やろうとしたけどやってら死ぬわ」

二人が答えた、その後全員（10名）の無事を確認し、新しいゲームを起動する

「ニミッツ級空母のシュミレーターゲーム何てはじめて聞いたよ」

「俺整備員がやりたい」

「僕も」

「俺も整備員で」

「じゃあ俺は無線手で」

「俺航海士で」

自分の個性にあつたものを選んでいく

「俺艦長でもいいか？」

「じゃあ俺は副艦長で」

「いいんじゃない、お前らの確な指示出来るもん」

俺も賛成した、彼らの指示で何度も命（ゲームの）を救われてきた

「残り三人は？」

「俺はく管制官」

「俺砲雷長」

「空母にそんなものない!!」

「皆このゲームの説明ちゃんと見た？このゲーム空母を自分好みに改造出来るんだよ」

「そうなの!？」

「ちゃんと説明読もうよ」

「めんどい」

「だから詐欺に引つ掛かるんだよ」

「あ!!バカ!!それは秘密だと言つたる!!」

「知らないな」

「こいつ!!」

「はいはい、じゃあ高橋、お前は？」

そうだった、コイツらが盛り上がってるせいでもしやべってなかった

「俺は。」

「パイロットで」

俺はこう見えても戦闘機や攻撃機、爆撃機、哨戒機、さらにはヘリまで操縦できる

(ゲームで)

「そっかー、お前らしいな」

艦長が言う

「お前の機体を整備すればいいんだな」

「頼むぞ」

「「おう!!」」

威勢のいい声が聞こえた

「とりあえず、このゲームのトップは俺だからリアリティーを上げるために上下関係を

つくるぞ」

「了解、杉下艦長、俺は副艦長だからトップの補佐だな」

「その他はほとんどの階級順になるからな」

「上官は杉下艦長と松本副艦長でその他は同じで良くない？」

「賛成」

全員の意見が決まった

「よし、総員、準備はいいな!!」

「準備出来てます!!」

艦長以外の全員の声がかげいに重なった

「よし、それでは出航準備（配置に付け）」

「砲雷長準備よし」

「管制官（オペレーター）準備よし」

「整備員全員準備よし」

「航海士準備よし」

「パイロット準備よし」

全員が配置についた（艦長がゲーム開始を押したら開始するため他の人は準備完了と書いてあるボタンをクリックする）

「よし、出航!!」

その言葉を聞いた瞬間、目の前に光りに包まれ、次第に意識が遠くなっていた

第1話 鉄の鳥

だんだん意識が戻ってきた

太陽の日差しが目に射し込んでくる

「何で外にいるんだ」

あの時、ゲームをしようとしたいきなら目の前が真っ白になって

「他のやつらは!!」

体を跳ね起こす

そこは家の周りでもない、東京でもない、空母の甲板のど真ん中にいた

「は?」

一瞬パニックになり叫びそうになったがなんとかおさえた

そして、現状を冷静に判断していく

「この空母、前田がデザインしたやつじゃん」

前田はこの艦の砲雷長だ

最新鋭の装備のなかに明らかに目立つ20センチ2連装砲、普通は無い垂直発射対潜水艦口ケット10門と艦対艦ミサイルトマホーク24門

小型すればミサイル駆逐艦になれるほどの武装だった
すると、

「総員、艦橋に集合せよ」

艦内無線から杉本の声が聞こえた

全員ここに来てしまったのか

とりあえず走って艦橋に向かった

数分後、全員艦橋に集まった

10人全員ここに来てしまったようだ

すると砲雷長が

「自分がデザインしたどうりの艦に乗るって新鮮だな」

呑気な言葉を放つ

その言葉で場が少し和んだ

すると今度は艦長が

「まあリアルで空母に乗れるのも無いのにまさか我々でデザインしたものは経験できないな」

「艦長、どうしますか」

副艦長が少し不安そうに問う

艦長の返事は

「大丈夫だ、ここには様々なシユミレーターゲームをかくぐつて来た優秀なやつらしかいない。心配なんて無いよ」

その場が明るくなってきた

「それでは全員配置に着け、出航するぞ」

その瞬間、了解と声が響き、全員が自分の持ち場に走っていった

10分後

「いつでも出航できますよ、艦長」

さっきまで暗かった松本も調子が出てきたらしい

「わかった、航海士に進路85度と伝えろ」

「了解」

「高橋」

艦長に呼ばれた

「何でしょう」

「今から出撃だ、SH-60に乗って周りを偵察せよ」

「リーダーはどうしたんですか」

「今起動したが万が一があったら困る」

「了解しました」

「整備員がいまエレベーターから上げ終わっていつでも飛べるらしいです」

副艦長がそれを伝え終わると同時に甲板へと走った

そこには、メインローターが始動しているSH-60と整備員の姿があった

「整備員がとよ」

「お安いご用さ」

鼻を高くしたこつちを見ていた

「こちら管制官、聞こえますか」

「こちらパイロット、ハッキリ聞こえてますよ」

「以後、こちらのことはタワと呼んでください」

「了解、じゃあこつちは」

一瞬悩んだ末に

「ブリッジでよろしく」

「了解、ブリッジ、会話は日本語で結構です」

「こちらブリッジ、了解」

「ブリッジ、発艦してください」

「ブリッジ、了解」

高度母艦から200メートルほど開けたあとに、旋回して偵察に向かった

かれこれ15分がたったが疲れは感じなかった
逆に楽しく思っていた

「タワー こちらブリッジ、レーダー異常ありません、そちらのレーダーはどうですか」
「ブリッジ こちらタワー、こちら異常無しです」

「まもなく帰還時刻だよな」

「そうです、あともう少しですよ」

ほとんど警戒心がなくなりかけたその時

「!! こちらタワー、母艦近くにレーダーが反応!!母艦から後方750メートル先!!」

「こちらブリッジ、すぐに向かう!!」

速度を上げ、すぐに向かった

そこに見えたのは

「こちらブリッジ、アンノウ（所属不明艦）は駆逐艦とみられる」

完全に日が落ちていた

暗視装置を起動させようとしたが何故か作動しない

「こちらブリッジ、暗視装置が起動できない」

「こちらタワー、サーチライトを起動せよ」

「こちらブリッジ、了解」

そしてサーチライトを起動し、駆逐艦に当てる

駆逐艦の中から数人出てきて驚いた顔でこちらをみていた

そして、乗員は明らかに学生だった

「こちらブリッジ、駆逐艦の乗員は学生と見える、しかも女性だ」

「こちらをタワー、確かですか？」

「確かだ、一旦撤退す」

その瞬間、機体のすぐ横を機関砲の弾が飛んできた

次の瞬間、テールローターが吹き飛んだ

「メーデーメーデーメーデー、こちらブリッジ、駆逐艦からの攻撃で高度維持不能!!至急

救援を!!」

無線はそこで途絶えた

「艦長!!高橋が駆逐艦の攻撃で墜落した模様!!我が艦が救援に向かいます!!」

「わかっている!!今から旋回して向かうつもりだ」

一方で

目が覚めたときは知らないところに寝ていた

「()、()は？」

「目が覚めたか」

「ここは駆逐艦晴風の医務室だ」

駆逐艦？ そうか、俺落とされたのか、つまり今いる場所は

「俺は生きてる？」

「生きている」

「俺落としたのは誰だ」

威圧をかける

その時

「みなみさん!! さっきの人起きたって本当？」

「ああ、今そこにいる」

「本当だ、みなみさんは食事してきていいよ、まだ食べてないでしょ？」

「ありがとう」

そこからさつきの子は去っていった

「ゴメンね、うちの水雷長が勝手なこととして、怪我してない？」

「目立った怪我は無いよ」

「よかった〜」

まあヘリの損害はでかいけど

「そういえばさっきのつてた空飛ぶ乗り物つてなに？」

不思議そうにこつちをみる

その時

「艦長、至急艦橋に来てください」

と聞こえた

すると、

「ごめん、私いかないと!!後でね」

と行って去っていった

しばらく考えて、あの子が艦長!?!ということに驚いていた

第2話 鋼の巢対鉄の鯨

晴風艦橋

「どこにいつてたんですか艦長」

「ゴメンねシロちゃん、それでどうしたの」

「先ほど前方100メートル先に謎の艦が今現在も接近中です」
「艦種は特定できますか」

岬は副艦長に問う

「見たことない艦でして艦種の特定は出来ないらしいです」

副艦長が言う

「何でもいいから撃っちゃえ!!」

と水雷長が言う

「下手に撃つたらそれこそ反逆行為として見られちゃいますよ」
すると、

「後ろから潜水艦がついてきてますよ」

「本当ですかまじこうじさん」

「多分伊203だと思えます」

艦橋に緊張が漂うなか、高橋は

「怪我はないけど戦力に怪我が」

頭を抱えていた

「痛いよ、経済的打撃が痛いよ」

「苦しいよ、損害報告の時の視線で圧迫死するよ」

ひたすら悩んでいた

「(そういえば隣の女性、ずっと寝てるけどどうしたんだろ)」

「大人しくしとるか」

さっきのみなみさんという人が戻ってきた

「外が騒がしいが何があった」

俺は状況を全くわからない状態でここにいる

「前方に全く知らない艦が来ておる、それと後方に潜水艦がいるらしい」

前方の艦？

あ、俺たちの艦だ

「それ、俺が乗ってた艦だと思えます」

俺が言う

すると、

「それ、本当ですか？」

と伝声管から声が聞こえる

「艦の形が同じなら。」

といいかけた瞬間、艦内が激しく揺れた

「なんじゃ!？」

隣の女性が跳ね起き、そのまま走って去っていった

俺も外に出よう

俺も立ち上がって、外に出た

「確実に俺が乗ってた艦だな」

こつちに向かつてきていた

一方

ニミッツ級空母艦橋

「駆逐艦と、その奥に潜水艦がいますね」

「対潜水艦ロケットいつでも撃てるよ」

「まず駆逐艦の動きを」

その言葉をいいかけた瞬間

「潜水艦魚雷発射!!」

「狙いは!!」

「駆逐艦だと思えます、アクティブソナーを使っていましたので」

駆逐艦のすぐ横で爆発した

「対潜水艦ロケット発射、用意よし」

「威嚇だ、8メートル先で爆破せよ」

「了解」

砲雷長はそれを聞き発射ボタンを押した

晴風艦橋

「前方の艦墳進魚雷発射確認!!」

「なに!!」

「狙いは潜水艦です」

「もしあれが当たったら」

轟沈、その言葉が脳裏に浮かんだ

水上の艦なら脱出出来るが水中となれば話は別だ

水圧でハッチは開けられない、開けたとしても水圧で潰れるか溺れ死ぬ

顔が青くなっているのがわかった

一方で

「威嚇射撃かな」

呑気に外で対潜水艦ロケットを見ているアホがいた
失礼だがどつからどう見てもアホにしか見えない

潜水艦はマスカーを使用したですでに8メートルまできていた
爆発とともに大きな水柱がたった

爆発の衝撃でエンジンが故障したようだ

浮上し、その場から動かない

晴風艦橋

「伊203が国際救難信号を発信」

「今のうちに逃げて」

「逃げるなら任せて」

ニミッツ級空母艦橋

「駆逐艦を追い」

「了解」

両艦共に現海域から離脱した

第3話 出会い

あれからどのくらい逃げただろうか

日がのぼって辺り一面が明るくなっている

旧式の駆逐艦と最新式の原子力空母が共演して違和感の塊になっている

「まだ帰してくれないのか」

いまだに帰してくれない

諦めムードになってきた

その時

「なんじゃ、まだ帰してくれてないのか」

ドイツ艦の子が声をかけてくれた

「まだですね〜」

呑気に返事をする

「コツソリ帰ったらどうだ」

「その後の説明に疲れます」

「なるほどな」

不思議なことにはここは民間航空機が通る空路の真下にいる
なのに機体どころかレーダーにも写らない

「そういえばお前はあの艦で何をしている?」

「何を、と言いますと?」

「役割は何をしている」

「俺か、俺はパイロットだ」

「パイロット、飛行船でも積んでるのか?」

何で飛行船だよ

EU加盟国が協力して飛行機をつくってるだろ

「違うよ、戦闘機やヘリに乗る」

笑いながら答える

すると

「セントウキ?ヘリ?」

真面目にわからない様子

まさかこの世界、航空機がない?

そうなることさつき飛行船がゆういつの空を飛ぶ乗り物になる

しかし、なぜないのか

アメリカに何人も航空機を作ろうとした奴がいるはずだ

失敗した？でも改良すれば出来るはず

頭が混乱してきた

「知らないのか？」

と聞いてみた

「~~知~~らん、初めて聞く名前じゃな、どんなやつなんじゃ」

「~~今~~度見せてやるよ」

「~~そ~~うしてもらうぞ」

そう言つてその場から立ち去り、艦橋に向かった

一方で

ニミッツ級空母艦橋

艦長と副艦長が話し合つていた

「片岡の報告は？」

「無線の周波数は不明、向こうの艦からライトによるモールス信号を送つてきてるとの事です」

「モールス信号の解読は？」

片岡は無線手だ

「敵意がないことを送ってきた後に高橋を保護していると送ってきています」

「わかった、山下」

「何でしょう」

山下は整備員だが戦闘も得意としている

「武装してAAV-7に搭乗しろ」

「了解、武装はどうします?」

「MP5とテーパー銃を持っていけ、弾種はフルメタルジャケットだ」

「了解」

「運転は副艦長に任せる」

「わかりました」

「迎えに行くぞ」

晴風艦橋

「向こうから高橋さんを回収するらしいですよ」

納沙さんがそう言う

「わかりました、それではちよつと高橋さんを探してきますね」

そう言つて艦長もいなくなる

その時

「小型艇接近」

「スキツパーか？」

「いえ、それにしておそすぎます」

「じゃあなんだ」

副艦長が問う

すると伝声管から野間さんの声が聞こえた

「武装した装甲車がきてる」

「装甲車つて水に浮いたっけ？」

「聞いたことないけど今来てるやつは浮いてるよ」

「とりあえず見に行こう」

艦橋から人が全員いなくなった

2分後

水に浮く装甲車から人が降りてきた

人数は三人

艦長と副艦長と思われる人と護衛が一人

銃は偽物かな

艦長が挨拶に行く

「駆逐艦晴風の艦長の岬明乃です」

「同じく副艦長の宗谷ましろです」

「ニミッツ級航空母艦の艦長の杉下快だ」

「同じく副艦長の松本雄治です」

挨拶が終わり本題にはいる

「早速ですがこちらの隊員を回収したいのですが」

「高橋さんならそこにいますよ」

完全に寝ている

「山下」

「了解」

初弾は装填してある

彼の体をギリギリ避けるように狙い、引き金を引く

8発位撃った

周りの子は少し怯えてしまった

すると起きた高橋が

「2発体にかすったのですが」

痛そうに腕を押さえている

「寝なければ良かったのにな」

「寝てるだけで撃たなくて良いだろうよ!!」

宗谷ましろ目線

嘘、本物？

もしかして私達を殺すの？

ついてない、特に今日は

高橋目線

腕がいたいな、ここがゲームじゃないことを証明出来たな

とりあえず帰るか

山下目線

あたりが静寂に包まれている

さすがに怖かったかな、悪いことしちゃったな

そんなことがありながら、高橋は母艦に帰っていった

甲板には5つの空薬莖と5つの弾痕、そして血液が残されていた

第4話 武蔵との遭遇

晴風とともに航行して数時間たった

向こうからの連絡は超弩級戦艦武蔵から救難要請を受信したようだ

この世界の学校のエリートが集まりらしい

しかし、なぜそのエリート達が救難要請をするほどピンチに襲われたのか

そして、なぜ教官達じゃなく晴風に送ったのか

謎ばかりだ

そして、レーダーには反応がない

この近海に座標に救難要請をしていた

もしかや沈没した？

ありえない、沈没した痕跡は見当たらない

その時だった

「レーダーに反応、超弩級戦艦サイズです」

この艦内無線で緊張が一気にたかまる

「晴風に発光信号送れ!!」

「了解」

「俺出るか？」

「今はいいい、今行ったら謎の勢力と見なされ撃墜だけだぞ」

「了解」

「晴風より視界でとらえたそうです」

「了解」

次の瞬間、すぐ横に大きな水柱が何本もたつた

「武蔵発砲!!」

「回避行動急げ!!」

「対艦ミサイルは？」

俺が聞く

「ない」

「ふざけてる？」

「マジ」

「対潜水艦ロケットはあるのに何で対艦ミサイルはないんだよ!!」

「設計者に言えよ!!」

「前田!!」

「何だ？」

「何で対艦ミサイルを搭載させなかった!!」

「それは戦闘機の仕事!!」

「万が一を知らんのか!!」

「艦載砲で何とかしろよ!!」

「20センチが超弩級戦艦と戦えるか？」

「まず超弩級戦艦が規格外なんだよ」

意味のない口論が続く

「F35出せるか？」

「今整備中、対艦ミサイルを積んでる」

大きな轟音が艦内に響いた

「第四格納庫浸水!!」

直撃は避けたが水に当たった衝撃で飛んできた破片が貫通したらしい

「ダメージコントロール!!」

「ダメコン行つてきます!!」

第四格納庫はAAV-7が格納してある

「晴風突撃しています!!」

「できるだけ援護しろ!!主砲発射用意!!」

「了解」

初の戦艦との実戦、艦長のおかげで怪我人は今のところ0だ

おっと、俺の腕の恨みは忘れないぜ

「主砲発射用意よし!!」

「主砲、撃ち方始め!!」

「主砲、撃ち方始め!!」

独特な砲撃音がしていた

浸水のブザーはまだ鳴り響いている

「F35離陸可能!!」

「了解!!」

ダッシュで甲板の第一カタパルトに向かう

F35が射出体制に入っていた

「俺が整備した、俺の分まで戦ってこいよ!!」

「ありがとう長谷川」

「行ってこい!!」

「おう!!」

F35に乗り込み、即座に不調がないかチェックし、射出の準備が整った

「目標は武蔵だ!!無力化させろ!!」

「了解」

カタパルトから射出され、機体を武蔵に向ける

そして、ロックオンをし・

「ブリッジ、高速艦艇が武蔵に接近、艦長が乗っている模様」

「何!?!」

下を見ると艦長が武蔵に高速接近していた

今撃つたら破片に巻き込まれる可能性があるため発射スイッチを押せない

しかし、高速艦艇は砲弾着弾の衝撃波により横転、武蔵に何か叫んでる気がした

主砲が晴風に向いている

止めなければ

ミサイルが無理ならガンポットで

発射スイッチを押した

勢いよく飛び着弾している

垂直飛行をし、確実に当てる

高射砲がこつちを向いた

回避行動をし、狙いを定めさせない

晴風が艦長を救出し、離脱した

母艦も離脱している

「ブリッジ、至急撤退せよ、繰り返す、至急撤退せよ」

「こちらブリッジ、了解」

結局対艦ミサイルを一発も撃てず、撤退した

雲行きが怪しくなってきた

怪我人は1名

ダメコンに行つた上田だった

ダメコン中急旋回したさいに切れた配線が水に感電しそれが体を感電させ一瞬意識不明になつたらしい

今は目をさましているが体は動かない

電気により麻痺を起こしているらしい

一回目の超弩級戦艦との戦いは戦略的敗北となつ

第5話 見えざる恐怖前編

夜は静かだ

寂しさもあれば安らぎもある

そこに舞い込んできたバカが起こした事態

艦長がダツシユして何処かに向かっている

「急いでどうしたんですか艦長」

「砲雷長が釣り中にクローラーボックスを入手、開けたところネズミが侵入、最悪だ」

こんなところで何で釣りしてんだよ

あ、そういえば艦長ネズミ嫌いだったけ

だから有名なネズミーランド行ったときも盛り上がらなかったんだな

「艦長!!」

無線手が走ってくる

「どうした」

「電子機器が急に使えなくなつて」

「は!?!」

最悪極まる

悪夢の連続だ

「砲雷長が暴れてるぞ!!」

「落ち着かせろ」

ネズミが侵入後

電子機器の謎の故障

ネズミと接触した前田の暴動

嫌な予感がする

急いで晴風の方に目を向ける

明かりはついてる

人はいない

全員寝た？

なら何故艦橋の明かりを消さない

つけていたら敵に位置を知らせるだけ

前田を止めに行つた副艦長が今度は襲ってくる

バイオハザードを思い浮かべる

感染者は人を襲い、襲われた側は感染し、感染してない人を襲う

完全に一致している

晴風甲板をもう一回見てみる

ネズミだ

最悪だ

向こうには弾バカがいる

「艦長!!」

叫んだときには遅かった

既にやられていた

艦橋に走り、扉を閉め、鍵をかける

そして、兵装を全てロックし撃てないようにする

艦内無線で

「今無事なやつは」

返事が来ない

絶望だ

フックが甲板に引っ掛かるのが見える

晴風の子だ

感染者が襲わない

彼女も感染している

完全に一人だ

武器は、万が一ということである艦橋の武器庫以外は全部ロックした

ゴム弾が装填してあるショットガンを取り、テーザー銃、接近戦用のスタンガン
一応戦える

扉の鍵を開け、扉を蹴り開ける

素早く入ってきたのが戦いなれてる山下だ

しかし、感染したせいで動きがあまい

見越し地点に銃口を向け、照準に入った瞬間引き金を引く

山下は吹き飛び、ぐったりと倒れこんでいた

外に出る、味方は0

希望が見れないなかこちらに晴風の子が何故か水鉄砲を持っている

近距離に來たのでCCQでねじ伏せ、後頭部に銃口を向け引き金を引き終わる

死んでないよな？

武器があっても一人はきつい

精神的にもだ

この一瞬の考え事が隙を生んでしまった

艦長が飛び蹴りをし、俺は避けられなかった

俺の体に直撃し、俺は飛ばされた

必死に照準を定め、引き金を引く

しかし、状態が不安定のため当たらなかった

飛ばされた先に、晴風がある

受け身をとろうとするが、時間が足りなかった

一瞬の油断でこんなピンチを生んだ

晴風甲板に体を強く打ち、気絶してしまった

第6話 見えざる恐怖後編

気づいたときは晴風の医務室にいた

救助されたらしい

「またあれですか」

また？

「二回目なんですか？」

「ええ、でもここまで酷くはなかった」

あのバカ前田、何で釣りなんかしたんだよ

「弱点をわかっていてもこの人数じゃねえ」

冷静でいられるのか、不思議だ

「弱点知ってるんですか」

「海水とこのワクチンが有効だ、ただ海水は時間がたつと効かなくなる」

なるほど、だから水鉄砲を持っていたんだな

想定よりも広まりが早かったんだな

対応に間に合わずやられたのかな

とりあえず感染していないのは、晴風艦長と副艦長、水雷長、砲術長、機関長、航海長、記録員、水測員、救護担当、ドイツ艦の副艦長

自分もあわせて合計で11人

相手はその3倍近くいる

武装はショットガン、テザー銃、スタンガン、音響手榴弾3個、水鉄砲3丁、木製の薙刀一本、ワクチンのみ

勝算は数の暴力で相当低い

しかし、戦わないわけにはいかない

「作戦とがあります?」

尋ねてみた

「ない」

即答だ

「とりあえず、自分達の向かう場所を決めて制圧しましょうよ」

「それでは生存確率が低下するのでは?」

「全員で固まったほうが安全かと思えます」

「時間がたつと海水は効かなくなるのでしよう?迅速に解決するにはこれが一番です」

しかし、流石に危険という考えもあるので2人ペアで制圧することにした

俺は男だからペアはなし

自分の艦を制圧する

「それじゃあ行きましようか」

扉をソツと開ける

廊下は誰もいない

サーマルかナイトビジョンが欲しい

明かりは消えていた

電子機器が逝ってしまったんだろう

俺は途中まで3ペアと一緒にだ

「誰もいないね」

「いきなり来るから気をつけないとね」

「喋り声もつとおさえて!!」

あ、叫んだ

足音が近寄ってくる

銃口を足音が聞こえるところに向けた

航海長が半泣きになっている

音が聞こえなくなった

その時、

「ぐ!!」

後ろから強打される

銃口を向け、引き金を引く

鈍い銃声が響く

命中したらしく、相手は吹き飛び、壁の頭を打ち、気絶した
すぐに貰ったワクチンを使い、安静にする

足音が増えた

「もう嫌ー!!」

「ちよつと!!」

航海長が単独で逃げ出し、ペアの副艦長が追いかける

「!! まずい」

俺も走り出す

空母のエレベーターのロックをつけていない事に気がつく

彼等も戦闘ヘリには乗れる

外に出たときは離陸体制だった

「くそ!!」

怖がらせたくないから見せなかったが、対物ライフルを持ってきていた
バレないよう晴風甲板に隠しておいて正解だった

狙いを定め、メインローターと機体の繋ぎ目を狙い撃った

狙いは外れ、エンジンに当たった

火を吹くのが見える

乗員は脱出したようだ

爆発し、轟音をたてる

衝撃波のせいか二、三人海に落ちた

多分乗ってたやつと整備した奴だ

最悪なのがフル武装をしていたことだ

暴発し、5、6発ミサイルが甲板と海に当たる

甲板は炎上し、海は水柱をたてていた

それで更に5人落ちた

全員意識がもどつたらしい

何が起きたかを考えている

貰ったロープで甲板に上がり

一人ずつ撃って海に落とした

こっちは制圧完了

あつちは、

こっちに発光信号を出している

手持ちの本で何を言っているか調べる

(せ、い、あ、つ、か、ん、りよ、う)

制圧完了したらしい

上手くいった

3時間もこの海域でロスした

日が昇ってきた

こうしてウイルスの恐怖は終わりを告げた

全ては終わったのだ

第8話 機雷掃海作業

電子機器は機能しないものなのか、なんとか航海を続けていた。既に後片付けを済ませ何もなかった様に航行している。霧がかかって視界も不良、電子機器も頼りにならない。霧があるので艦載機も発艦出来ない状況である。

「暇だ〜」

前田がそう言い艦載砲を点検していた。

「整備なら上田に任せればいいじゃん」

「暇だから俺がやってるし、まずアイツ甲板の点検中」

今の座標すらわからない。

どうしたらいいのか悩ましいところだ。

考え事をしていたとき艦が轟音と共に大きく揺れた。

「なんだ〜!!」

抱えていた砲弾を落とさないうように抱えながら前田が言う。すると艦内通信で

「艦首浸水を確認、ダメージコントロール員は急行せよ」

俺も艦橋に状況確認のため走って向かった

「どうした!!」

俺が大声を出し聞く

「艦首に何かが当たり浸水した」

「魚雷か？」

「こんな霧の中で撃つか？」

「となると」

「多分あれだな」

「晴風も当たった模様、晴風無傷です」

霧が都合よく晴れてきた

見えたのは突起を見せながら浮く球体

機雷だった

「やはりか」

「どうします艦長」

「12.7mm機関銃付きのシーホークを出せ、高橋、出動だ」

「了解です、それとお願いなのですが」

「なんだ」

「実はくらくらでして」

「はく、わかった、許可しよう」

「ありがとうございます、それでは」

「艦長、何を許可したのですか」

「何でもよからう」

何処か遠いところを見るかのような目をし、艦長は答えた

一方で

「シーホーク行けるか？」

「いつでもOKな様に用意しました」

「ありがとうございます」

「また落ちんじゃねーぞ」

「安心しろ」

「それじゃ、俺はF/A18の整備だからこれで」

長谷川はそう言い格納庫に走っていった

「それじゃあ行くか皆」

「ようやく撃てる!!」

「ウイ!!」

「なんじゃこれは」

最初の二人の反応は予想外だが最後の一人は予想通りの反応だった

「早く乗れよ」

「これが飛ぶのか!!」

「飛ぶぞ」

「早く撃とう!!」

「わかった!!わかったから大人しくしろ!!」

そう言いながらエンジンをかけ、管制官とやり取りを始める

「タワー こちらブリッジ、機雷を掃海してくる」

「タワー 了解 落ちるなよ」

「あんたも言うのかよ」

「風が南西から時折強いのが来る、注意せよ」

「注意感謝する」

機体が浮いた

重機関銃をキラキラした目で見る二人と自分が飛んでいることに少し恐怖している

ものがない

「誤射はするなよ」

「わかつてる!!」

「ウイ!!」

注意を呼び掛け

「撃つていいぞ」

そう言った瞬間に重々しい発砲音が響く

機雷が爆発し水柱がたった

ドンドン弾を使っていく二人

(弾薬の消費量が \blacksquare)

心の中で眩き、出来るだけ揺らさないようにホバリングしていた

ドイツ艦の子(先程二人がミーナと呼んでいた子)は少し怖がっていた

「ブリッジ こちらタワー 応答せよ」

管制官から通信が入った

「こちらブリッジ タワー どうした」

「晴風から高速艇が出た、沈んでいる機雷の鎖を切つて浮かべるそうだ」

「ブリッジ 了解 注意する」

「その弾バカ二人、あんたらの仲間が高速艇で来るらしい、撃つのを中止しろ、仲間が

肉塊になるぞ」

「もつと撃ちたいけど、わかつたって弾バカってどういうことよ!!」

「そのままの意味だ」

1分後

高速艇が機雷をドンドン浮かばせていく

(そろそろ全部かな)

上手く行っただと思っただその時

高速艇が機雷に引っ掛かった

水柱が上がる

「!! タワー こちらブリッジ 一艦が機雷にやられた!!」

「こちらタワー こちらでも確認した 晴風艦長たちが乗っている高速艇が救助に向

かっている、現場で待機せよ」

「タワー 了解」

事故現場に急行し、辺りを確認した

救難用ボートが見えた

「よかつた、重安全装置作動してる」

「重安全装置ってなんだ」

「知らんのか」

「知らん!!」

「この腕輪みたいなやつです、これでどんな危険からも守ってくれます」

自慢気に言われても困る

晴風艦長たちが到着し、救助して、晴風に戻っていった後、浮いている機雷を掃除して、母艦に戻った

「人生でこんなのに乗れるとは」

「また乗せてねー」

「機関銃撃ちたいだけだろ」

「勿論!!」

「ウイ!!」

「お前は日本語を喋れ!!」

そんな雑談をし、航海を続行した

まだブルーマーメイドには存在を知られていない

知らせるための連絡がまだとれていなかった

現在も晴風単独で航海していると思っているのか

それとも既にこちらの存在を確認しているのか

真実は闇のなかだった

戦艦武蔵の現在位置も誰も把握していなかった

超弩級戦艦は速度が遅い

しかし、時間がたてば遠くにいつてしまう

残された時間はもうすぐで無くなるうとしていた

悪天候

そろそろ地面が恋しくなってきた

ゆらゆら船に揺さぶられなそんなことを考えていた

今はどうすることも出来ない

とりあえずぶらぶら歩くだけ

整備は整備員がするし出勤命令は当分でないし、暇でしかない

それに比べて晴風の方は賑やかだった

水鉄砲で遊ぶものもいる

緊張感ゼロ、羨ましい

甲板でとりあえず筋トレをすることにした

そうしないと暇でしかない

問題はその時に起こった

「よう、高橋、暇そうだな」

「ほんと自由だなお前は、艦載砲の手入れはどうした、友達だろ？」

「終わったさ、後は整備員が精密検査だ」

「あ、そう」

無愛想に答える

「聞いた話なんだが晴風の方、真水が無くなったらしいぜ」

「それがどうしたんだ」

「風呂を入りに来るだとよ、つまりだ」

「お前、殺されるぞ」

「関係ないさ、発育段階の胸を一目でも拝みたくないか？」

前田はニヤニヤしながら話していた

「諦めろ、俺が止める」

「何だよ、いっしょに行こうぜ」

「却下」

どうでもいいトークが続く

その時、雨が降り始めた

「残念だったな、真水の確保は確定」

「甘いな、まるでケーキのように甘い」

イライラさせる天才か

「彼女らは今水浴びをしている」

まさか

「水着で遮られるが僅かなら見えるぞ」

「させるか!!」

右ストレートを顔面に食らわせてノックアウトした

だんだん波が強くなってきた

「総員、艦内に戻れ」

艦内無線で警告を受ける

気絶している前田を連れて戻った

艦の揺れを抑えるための奴があるのに結構揺れていた

風が強い

雷が落ちてきた

向こうは大丈夫だろうか

そんな心配をしながらボーツとしていた

余計やることを失ってしまった

暇でしかない

12・7mm重機関銃でも手入れしようと考えたが、めんどくさいので止めといた
悪天候のせいでやろうとしたことができなくなった

艦が大きく揺れる

「晴風と接触!! ダメージ軽微だが注意せよ」

艦内無線で報告がきた

格納庫にいるが異常がないのにほっとした

しかし、安心したのはつかの間

ミサイルを載せた台が滑って壁に当たりそうになっていた
走って行って止めたが勢いが強く、腕が悲鳴をあげていた
頑張って止めたが肩がとても痛い但我慢した

腰もちよつと危ない

年のせいだろう

眠気が襲ってくる

その場で眠ってしまうのを何とか防いだが、動くのが辛い
何故だ

そこに前田が通りかかった

「随分顔が赤いな、トマトみたいだぞ」

「そうか」

「大丈夫か？」

「平気だ」

そう言った瞬間意識が薄くなりその場に倒れた
前田の声がだんだん遠くなっていた

2秒後、俺の意識が持ってかれた